

「古代環日本海の交通と貿易センタービル」

武田 佐知子 氏 （追手門学院大学 教授）

と き：平成 27 年 6 月 4 日（木）

ところ：ホテルニューオータニ ザ・メイン「麗の間」

## 講師のご紹介

### 1 略 歴

- 1971年 早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業
- 1977年 早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了
- 1985年 東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了 文学博士  
大阪外国語大学外国語学部助教授
- 1997年 大阪外国語大学外国語学部教授
- 2007年 大阪大学大学院文学研究科教授  
国立大学法人大阪大学理事・副学長
- 2014年 追手門学院大学基盤教育機構教授
- 2015年 追手門学院大学地域創造学部長
- 2013年 日本海学推進機構運営委員
- 2014年 日本海学推進機構会長職務代理者

### 2 専門分野

日本古代史・服装史

### 3 受 賞

- 1985年 サントリー学芸賞思想歴史部門
- 1995年 濱田青陵賞
- 2003年 紫綬褒章

### 4 著 書

- 『古代国家の形成と衣服制—袴と貫頭衣』（吉川弘文館 1984年）
- 『信仰の王権 聖徳太子—太子像をよみとく』（中公新書 1993年）
- 『衣服で読み直す日本史』（朝日新聞社 1998年）
- 『娘が語る母の昭和』（朝日新聞社 2000年）
- 『古代日本の衣服と交通—装う王権つなぐ道—』（思文閣 2014年）
- 『いにしえから架かる虹—時と装いのフーガ』（いりす・同時代社 2014年）

など多数

はじめまして。私は東京生まれですが、大阪でもう 20 年以上にわたり教職生活をしており、環日本海にはあまりご縁がなかったのですが、実は、大阪の方へ就職して間もなく、環日本海についての論文を地理的・歴史的に書いたことがあります。そのご縁で、当時は富山市が日本海学に力を入れておられたので、確か富山の名鉄ホールだったと思いますが、500 人ぐらいの富山の皆さんの前で初めて講演したことがあります。みなさんもう、お亡くなりになってしまいましたが、大林太良先生や、同志社の森浩一先生、門脇禎二先生など錚々たるメンバーと御一緒でした。そんなに多くの人前で話をするのは初めてだったので、声が震え、あとでそのことを先生方からかわれたことを、今でもまざまざと思い出します。

以来、日本海とは非常にご縁ができ、島根県、兵庫県、新潟県、富山県、秋田県と、諸地域を色々に見学させていただき、見聞きしつつ、自分の説を確認しているところです。

## 「逆さ地図」

図①

「環日本海」という認識が浸透するようになったことについては、1994 年に富山県が作った「逆さ地図」(図①)の存在があります。私たちは普通、メルカトル図法の北海道が右上にある地図しか親しみがありませんが、「逆さ地図」は、大陸側から見ると日本はどういうふうに見えるのか、そして日本海を取り巻く地域が大陸から見るとすごく近い所だということを明らかにしてくれる地図です。



私がこの地図を最初に目にしたのは、講演のためにちょうどフランス・パリから日本に帰ってくる時のエールフランス機内でした。日本が近付くとこの地図が示されるのです。航路図がつき、今、日本海のどの辺を飛んでいるかという表示があります。他の国の航空会社ではこういう図は見たことがありませんが、エールフランスが、

まさにロシア上空を飛んで日本海に入ろうとしているところをリアルタイムで航路を描いてくれました。

やがて飛行機は関西空港にランディングし、翌日大阪で富山県主催の日本海学シンポジウムがあり、環日本海の交流について話しました。そのとき画面に映し出された逆さ地図を指して「私は昨日、この写真を見ながらパリから帰ってまいりました。」という話から始めたことを思い出します。この図は、確かに太平洋側の地域よりも日本海側の地域の方が大陸にずっと近いことを物語ってくれる資料です。

図②

「逆さ地図」は1994年にできましたが、それが既に教科書にも採択されております(図②)。日本文教出版の中学生の教科書です。その教科書では、「逆さ地図」と同じ見開きページに上淀廃寺で発見された非常にきれいな彩色が施された壁画

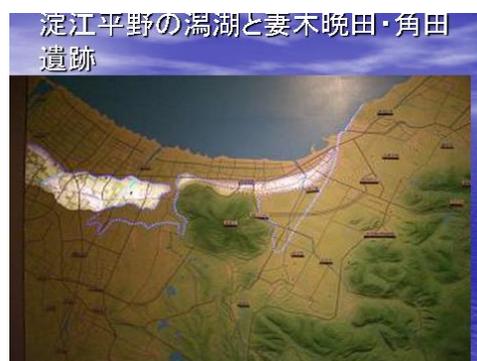


画面を載せています。この鳥取県淀江の上淀廃寺壁画は法隆寺の壁画に匹敵する、美術的価値のある素晴らしい作品ですが、環日本海を介した、大陸からの直接の文化の交流を物語る証拠なのです。

## 海を渡ってくる人たちの物々交換の拠点

図③

環日本海の地域はどのように大陸と交渉を行っていたのか、私はそれ以来、日本海に非常に興味を持ち、一体どういう地域が日本海貿易拠点になったのかを考えてきましたが、すると、非常に面白い事実に至りました。



先ほどの上淀廃寺のあった淀江平野の地形図(図③)ですが、白く示している所がずっと日本海から入り込んでいる昔の潟湖です。

今はもう埋め立てて陸になっていますが、あの部分が白く、入江が入り込んでいたと考えられます。その入江が一体どのような意味を持ったかという、日本海の荒波を避けて、大陸からやってくる船などは、ここへ入り込んで上陸したと考えられます。

そう環日本海の港の地理的特色を考えていましたが、丁度1週間ぐらい前に富山新港の視察をさせていただきました。新湊大橋の展望台に上がって見ると、富山新港は河川の河口に造られた港であることが非常にはっきりします。日本海から大型コンテナ船が入ってきて、これは北陸電力がLNGの基地を造るために栈橋を造っているところだそうですが、そうした施設が河口の内側にできているという特徴が日本海側の港にはあります。

もう一つ、非常に印象的なのは、最初に今日お話しする貿易センタービルというイメージはどこからわいてきたかという、新潟に朱鷺メッセという建物があります。朱鷺メッセを私は海側から確かめたくて、わざわざ佐渡へ行き、海から新潟港に入ったことがあ

ります。朱鷺メッセは、信濃川河口の奥に、「万景峰号」が停泊する栈橋などが見晴らせる非常に高い建物としてありました（図④）。

私はこれを何と結び付けたかという、古代の人々の貿易の拠点としてのイメージです。沿海州や朝鮮半島などの人々と、物資を交易、交換するときには一体どういう手法を用いたのか。今のように通訳の制度が発達しているわけではないので、古代人は、つい最近まで未開社会で行われていた物々交換をする時の手段を用いたと考えられます。文化人類学的に「沈黙貿易」、あるいは「無言貿易」といわれる商業的営為があります。言葉の分からない民族同士が通じない言葉で、意志を伝えようとする、誤解が生じるので、見晴らしのいい所へ自分の交換したいもの、自分が相手の民族に提供できるものを並べておくのです。そして物陰に隠れて、その民族が来る

図④



のを待ちます。すると、相手方の民族は、自分の欲しいものをその中から選び取り、かわりに自分が提供できるものを提供する、「無言貿易」「沈黙貿易」といわれる営為が文化人類学的に検証されています。そして古代の資料を見ていると、コミュニケーションをできるだけ避け、簡単な意志を示し、物を交換する、貿易の非常に原始的な形が日本海でも行われた可能性があります。

この弥生時代の大きな土器に描かれているのは、ものすごく高い柱の上に立った高床式住居です（図⑤、⑥）。そこから長い長い階段が下りています。階段の先には、非常に奇妙な格好をした、頭に羽根飾りのようなものを付けた人々がオールでこぎ寄せている図があります。私は、これは出雲大社の起源になった建物ではないかと考えています。

出雲大社は、伝説上は「引橋一町」と申しまして、非常に長い階段が付いていたそうです。高さは、伝承上は96m説と48m説がありますが、ものすごく高い建物が推定されます。今まではあまりにも荒唐無稽すぎるからうそに違いないといわれていましたが、ご承知のように出雲大社はさまざまな復元図が想定されています（図⑦）。

そして今の出雲大社の本殿の上から日本海を展望すると、日本海がちゃんと陸越しに見えます。今は28mぐらいいしかありませんが、

図⑤



図⑥



図⑦



昔の出雲大社は一体どのようなものだったかという、近年出雲大社境内遺跡の発掘が行われまして、ものすごく太い木を三本合わせて鉄輪で結び、全体としてはこれがずっと上まであると考えてください。このような太い柱で支えていた非常に大きい建物が想像復元されています（図⑧）。

図⑧



これは発見された柱が境内のどこにあったかを示している図です（図⑨）。こうした大きい建物が想像されています。

出雲大社が本当は 96m あった、48m あったというのは、もしかすると真実ではないか。今の 28m でも日本海が見えますが、28m という低い建物ではなく、もっと高い建物であった可能性があります。

図⑨



なぜそんな高い建物が必要とされるかという、この図です（図⑩）。

右の方に海がありますが、日本海にそのまま面しているではありません。

図⑩



日本海からずっと入り込んできた潟湖に向かって、要するに船がやって来られる、海の向こうから来る人のために階段があるのです。出雲大

社があんなに高く大きいのは、出雲の国の人々が日本海を越えて攻めてくる人たちを見張る望楼のためにできたのではないかと思います。そうではなく、海側に向かって階段が付けられているということは、海側からこぎ寄せる人々が登れるように作用しているのではないかと。つまり防御的、望楼的施設ではないという考えに至

るわけです。

では、一体この建物は何だったのかということになります。私は、実は古代の人々が交易を行うために、非常に見晴らしのいい所で物を交換し、それを出雲の国の人々みんなが公認できるような交換の場所として出雲大社があったのではないかと想定するわけです。

そういう目で見ると、古代にはたくさんの高い建物があります。一番有名などころでは、青森にある縄文の三内丸山遺跡の屋根のない高い建物も、多分、その一環だと考えることができます。

### 史料から見る高層構造物の役割

この妻木晩田遺跡も、日本海を見下ろす高い山に高床式住居を建てています（図⑪）。

図⑪

では、こういう高い建物は何のために要求されたのか。『日本書紀』に斉明天皇という大変有能な権力者であった女帝の命を受けて、日本海岸をさかのぼって遠征し、蝦夷（えみし）を討ったり、肅慎（みしはせ）を討ったりして領土を拡大していった阿倍比羅夫（あべのひらふ）という将軍がいます。



### 史料⑮

阿倍比羅夫は 200 艘の船で船団を組み、肅慎を征伐しにいきました。そのときに、これは秋田よりもっともっと北の方、あるいは青森、北海道にも渡った地域だという話もありますが、蝦夷たちが比羅夫が上陸した所にやってきて、「肅慎に攻められているので、その脅威を避けるため、自分たちは大和朝廷に服従したい」と申し出ます。阿倍比羅夫たちは、蝦夷と一緒に肅慎を戦闘で従属させるのではなく、平和裏に従属させようと思いました。

大河のほとりに至った阿倍比羅夫は、4 行目、「綵帛（さいはく）・

兵・鉄等を海のほとりに積」んで、これは「而令貧嗜（ほめのましむ）」とありますが、うらやましがるわけですね。なぜうらやましがるかということ、着色した絹や兵器、鉄のインゴットなどは肅慎の世界では生産できないのです。大和朝廷は、もし肅慎が自分たちに恭順したら、これをあげましようというふうに、非常に見晴らしのいい海岸にそれらの事物を並べて見せたわけです。

そうすると、沖から2艘の船で老人がやって来て海岸に上陸し、阿倍比羅夫側が並べた事物を見て回りました。そして、その中に「単衫（たんさん）」というひとえの簡単な大和朝廷の着物を手に取り、着てみて、それから絹を一端だけ持って船に乗って帰って行きました。うまくいくかと思うと、残念ながら肅慎の集団の中に戻った彼らは、多分そこで会議をしたのでしょうか。そこで反対が出たのか、やはりこんな物をもらえるからといって従うのはよそうということで、もう一度船をこぎ寄せてきて、着ていた衣服を脱ぎ、絹も返し、それから戦争が始まり、結局、肅慎の集団は皆殺しに遭ってしまいます。そういう物語が「斉明紀」6年の条に伝えられております。

これは、非常に重要な意味を持っています。これこそ、先ほど申し上げた沈黙貿易の一つの形です。非常に見晴らしのいい海岸にそうした絹や鉄のインゴットなどを置いて、肅慎の世界では生産できないものを、自分たちに従ったらこれをあげるぞという形で彼らを懐柔しようとしたものだと思います。

この記事は実は『日本書紀』に書いてあることですが、ずっと世界各地の事例を見ると、いろいろなところで行われていることがわかります。

## 史料①

私が大阪外国語大学で教えているころ、ロシア人留学生がいました。彼女はロシアの海軍文書館所蔵の未公開史料の中から、サハリン遠征に関する史料を掘り出してきて、それを日本語訳しました。19世紀初頭にロシアのレザノフが日本に国交を要求してきますが、

江戸幕府がそれを排斥して、第一次日露戦争といわれる大きな事件に発展した事実があります。その時、ロシアは、沿海州は既に松前奉行などが進出しており、蝦夷と江戸幕府の関係をきちんと築いていたわけですが、ロシア政府はそれを切り崩しにかかり、レザノフ等々がそのために何をやったかという史料です。1806年ごろの史料を引用しております。

彼らは、土地のアイヌたちにロシア料理を食べさせたり、日本のコップなどをあげたり、さまざまな自分たちと平和裏に関係を結ぶとこういうものが手に入ると、誘惑します。勲章をあげたり、土地の領有権を認める証書をあげたり、彼らにさまざまなものを提供します。そこでアイヌの酋長たちもその気になり、日本とロシアとのあつれきが始まり、大変な戦闘状態につながっていくわけです。そうした間に、先ほど申し上げた「沈黙貿易」、物を媒介にして関係を取り結ぼうとする民族間の相互関係を想定できるわけです。

このような目で見ると、日本海沿岸には諸民族が貿易するために、砂浜は遠くから見通す程度ですが、砂浜よりもっともっと大きな機能を持つのは、先ほど言いましたような九十何メートルもあるような高さの上に築かれた神殿でありましょう。神殿であることがどう大事かと申しますと、出雲大社は出雲地域の人々が非常に尊敬をもって祭っている神様です。もし、出雲の民と平和的友好関係のもとに関係を取り結びたいと思う人々がいるとすると、その出雲の国々の人々が持っている価値観、つまり出雲の神を斎（いつ）きまつるという価値観を認めない、たとえばもし、出雲大社を壊してしまうと、そこで友好関係を結べなくなってくるわけですが、そうではなく、阿倍比羅夫たちは、土地の神を非常に敬愛していることを打ち出していくわけです。

### 史料⑬

齊明天皇五年（660年）のことです。これも阿倍比羅夫が180艘の船で船団を組み蝦夷を討ちました。そのときに、飽田・淳代の蝦夷

200 人がやってきたので、彼らに大饗する、つまり大パーティを開いてさまざまな物をあげました。そこで比羅夫らがやったのは、五色の綵帛、つまりものすごくきれいに彩色された絹と船 1 艘を蝦夷の地主神、彼らが祭っている神に捧げるという行為でした。蝦夷が阿倍比羅夫軍に従うとこういうメリットがあるということを実際の形で示します。そうすると、この飽田・淳代の蝦夷たちは何を感じるかということ、阿倍比羅夫軍は自分たちの価値観を決して否定しない、自分たちの神に物を捧げてくれるということは自分たちの価値観を認めてくれることを意味していると、安堵する、そこで和平が始まるわけです。

さらに阿倍比羅夫軍はここに政所を置きました。つまり蝦夷支配の拠点を置いたということが最後に出てきて、蝦夷に日本の大和朝廷の位階二階さえあげたと書いています。要するに、軍隊、征討軍を出していながら平和裏に交渉しながら蝦夷を懐柔しようとしていたという過程が見て取れます。

私は、出雲大社も実は、出雲の国の人々が斎きまつる神を非常に高い所へ祭ることにより、出雲の国にこぎ寄せてくる民族との非常に友好的な交易、貿易を可能にする貿易センターであったのではないかという説を立てています。

日本の神というのは、建物ではなく依り代であり、そこへ神が降りてくるといいますが、出雲大社については例外で、昔から「杵築大社」の名があり、杵で突いて固めて建てたと、要するに建築物が大事であることがすごく強調されています。他の伊勢神宮等々の神様とは違う質の神様です。人工的構築物、建物がまずありきという神社として、昔から存在してきたわけですが、その原因は、恐らく私が言ったように、非常に大規模な構造物がまずなければならない。それは何のためかということ、貿易センターとしての機能を編み出すためだと考えます。

## 淳足柵（ぬたりのさく）は大規模建造物

そういう目で見えていくと非常に面白い史料があります。古代の新潟県に、淳足柵（ぬたりのさく）がありました。これは20年ぐらい前でしたか、奈良時代の木簡が発見され、これが淳足柵の発展形態だったのではないか。淳足（ぬたり）というのは、後に沼垂城（ぬったりじょう）という、『続日本紀』の中にお城というふうに表示もされているほど、恐らく非常に大規模な建築物であったことが想定されるわけです。

古代、淳足柵は、『日本書紀』にどのように描かれているかという、面白い史料があります。

### 史料②

『日本書紀』に、皇極天皇が大きな寺を奈良、大和に造りたいと思ったとき、大きな寺を造りたいので、「興越之丁（こしのよぼろをおこす）」。

つまり、越の国、つまり越前・越後・越中の大工さんたちを挑発して大和へ連れてきて、大きな寺を造りたい。百済大寺という飛鳥地方に非常に大規模なお寺の跡が発見されていますが、その百済大寺を造るため越の国の大工さんを連れてくると書かれています。ということは、越の国の大工さんというのは建築技術に優れていたことが分かります。

### 史料③

その次のくだりでは、越の辺りの蝦夷が大和朝廷に服従してきたと。

### 史料④

史料④も面白い記事です。天皇が難波長柄豊碕宮、つまり今の大阪城のすぐそばの長柄の豊碕宮に遷都しようとしたと。そのときに、老人たちはどういううわさをしていたかということ、これより前、遷都以前の12月のことですが、今年の春から夏にかけてネズミがたく

さん難波の宮に向かっていたことが遷都の兆しだったと人々は納得したという話です。大規模な都の造営はものすごい大事業です。建造物も建てなければなりませんし、道路工事もしなければなりません。そういうときにネズミが動くという一つの前兆があるわけです。

大化元年に、海畔の枯查、要するにいかだが東へ向かって流れていったと。それは、この柵を造る兆しである。この柵は、先ほど申し上げた新潟の淳足柵です。それが造られる前兆だとあるわけです。

### 史料⑨⑩

先ほどと同じように、大和の都に向かってネズミが移動していた。ネズミの移動が遷都の兆しであるといわれております。

### 史料⑤

淳足柵についても、柵ができるときにネズミが動くこと、それからいかだが海岸に押し寄せること等々がいわれるわけです。

いかだというのは「如耕田状（こうでんのごとし）」、田んぼのようだと。日本の古代の田んぼは非常に長い田んぼでした。それで非常に耕しやすくします。耕田のごとしというのはそういうことですが、いかだに組んだ大量の材木が海岸から東へ向かって流れているのも、要するに淳足柵ができるということを象徴しているのだろうというわけです。

### 史料⑥⑦

「越の国のネズミが昼夜相連、東へ向かいて移り去る」というのも、先ほど言った大和へ遷都するのと同じように、ネズミたちがどんどん東へ向かって移動しているのは、これも柵を造る、沼垂城を造る証拠だろうという、非常に断片的な史料の中から、今や全く雲散霧消して新潟のどこにあるかも分からない沼垂城が、難波の遷都に比較できるような大規模な建造物であった可能性があると思いうわけです。

## 貿易センターとしての出雲大社の構造

平安時代の史料に、日本には三大建築物、三大高層建築物があると、「口ずさみ」と申しまして、人々が歌に歌っていました。それが伝えられております。平安時代の三大建築は、出雲大社と東大寺の大仏殿と平安京の大極殿だそうです。この三つは、私たちも納得できる大きさを、多分、古代の世界では誇っていたであろうことは納得できるわけです。

出雲大社の「金輪御造営差図（かなわのごぞうえいさしず）」は、江戸時代に描かれた造営設計図で、本居宣長が引用していますが、それも私たちは信じられないといってきましたが、ご覧のように巫女さんに比べて非常に大きな木組みのもとになった、その出雲大社の設計図まで発見されていることで、信ぴょう性が増しました。出雲大社が今あるよりずっと大きい建物であったことは容易に想定されます。出雲大社と東大寺大仏殿は、今は江戸時代の造営なので非常に小さくなっておりませんが、もっと大きいものであったことは分かっています。

平安時代に天下無双の大厦と称され、16丈以上の高さはあったという「金輪御造営差図」は、先ほどお見せした引橋一町の階段を持ったような大きな建物でした。何のために建築物が造られたかという、貿易センターとしてどこからも見晴るかすことができる大規模建造物でなければならず、その地域の人々が海の彼方から来る人々と貿易、交易を持つためであったのだろうと私は思います。

## 史料⑰

出雲大社が非常に大きな建築物であったことには、さまざまに面白い伝承もあります。史料⑰に『懐橘談』を載せております。平安時代の末に、出雲大社は非常に高い建物だったので、しょっちゅう倒壊しました。しょっちゅう地震に遭い、雨風に遭い、倒れます。ところが、倒れても性懲りもなく出雲大社は全て再建されます。再建には大変お金が掛かります。大きな材木も要ります。

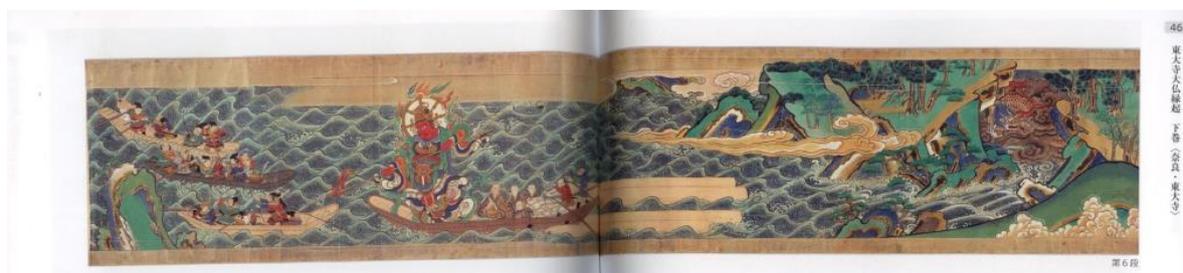
大きな材木が必要となると、「国司帥中納言藤原家任が日記に云う」という形で書かれているのは、天仁三年、海の彼方から稲佐浦に大木が100本流れ着いたと。これは神様の御示現だというわけですが、因幡の上宮の御近辺に長さ15丈、直径1丈5尺の大木が寄ってきた。それを切ろうとしたら、これは出雲大社の造営に使うから切ってはならないと大きなへビがまといついて言ったとあります。

そして、その木が出雲大社の造営に利用されました。この話は、「<sup>よりき</sup>寄木の<sup>ぞうえい</sup>造営」といわれており、永久三年、天仁三年から間もなくして出雲大社が再建された、これを神の御示現によって15丈の長さの木が海から流れ着いたから、それで造営ができたという伝承に結びついていったわけです。

それと同じようなことが、東大寺の「大仏縁起」にも、長門国で切り出した木を大和へ持ってこようとするときに龍などが助けて、東大寺大仏殿の材木を調達し、大和へ運んだと書かれております。

(図⑫)

図⑫



つまり、東大寺にしても出雲大社にしても、非常に大きな木が利用されて造られた建物でした。それが『日本書紀』の断片的な記述を探っていくと、なんと、今は全く失われている淳足柵、新潟は非常に地盤の悪い所であり、ボーリングして淳足柵の痕跡が出てこないかといわれていますが、そうしたものを幾つ掘っても、なかなか新潟の土壌はすごく軟らかくて分かっていません。しかし、そうした史料から想定されるのは、淳足柵は、平安時代に東大寺、出雲大社、平安京大極殿などの三大大厦と呼ばれた建物に匹敵するような規模

を持っていたのではないかということです。

それが日本海にそびえていました。それは、最初に見た朱鷺メッセの上から見晴らかせるような、非常にランドマーク的な意味合いの強い建物が、『日本書紀』の例を見ても、さまざまな発掘事例を見ても、大概日本海沿岸の河口に造られているか、潟湖という入り込んだ水辺に造られています。それは、出雲大社が潟湖に向かって階段を延ばしているように、防御の砦でも何でもなく、日本海の人々と交易するために造られた建物ではなかったかという壮大な仮説を立ててみるわけです。

こういう史料が日本側にあるのですから、環日本海の向こう側に同じような発掘事例はないのか、本当はロシアや朝鮮、中国などの研究者とも検討してみればいいわけですが、残念ながら、今何がこだわられているかという、まず「日本海」という名称自体が拒否反応を招いてしまい、これがなかなか国際的シンポジウムなどを設定できないジレンマがあります。日本側の発信がなかなか受け入れられないという非常に残念な事態なのです。

## 衣服、建造物の記号的意味

私はそもそも衣服関係を研究していますが、民族の違いは衣服の違いであることは、徹底的に中国の考え方です。衣服はその人そのものを表します。ですから、日本人が中国服を着ると中国人になってしまうほど、中国の儒教的観念からは、衣服というのがその人間存在そのものを表すという考え方になってくるわけです。ですから、中国の歴史書には、必ず一番最後に「蛮夷伝（ばんいでん）」という周辺諸民族の記述があります。そこには、必ず衣服の記述があります。ある衣服を着ていた民族が中国と国交関係を結ぶことにより、どのように衣服が変化していったかということ非常に細かく、注意深く描写してあります。

ですから、日本古代史を専門としている私にも、中国周辺の諸民族の衣服は非常に分かりやすいです。さっき肅慎の話をしました、

肅慎に阿倍比羅夫軍は大和朝廷側の非常に粗末な衣服を海岸に並べたところ、肅慎の首長たちは二人ともそれを着て、つまり大和朝廷との恭順の意思を彼ら二人は持っていたに違いなく、それを着て帰りました。ところが、仲間内から反対を受けて、やはり大和朝廷に従うわけにいかないと衣服を脱いで返したところに戦闘が始まるという事態がありました。

そうすると、この『日本書紀』の記述は、そうした「沈黙貿易」、意志の疎通をどのように行うかが、単に鉄のインゴットの交換や絹を採って自分たちの持っているものと交換するだけでなく、日本の衣服を着るということは日本の価値に従う、日本の秩序に従うことを示しています。衣服というのは、そういう目に見える形の人間の意思の確認を示しています。それは、その地に祭られている神や、その神の尊厳を認めることや、さまざまな要素に結び付いていくわけです。

ですから、今日お話ししたのは日本海沿岸のことですが、同じことは中央の律令国家の中でも行われます。奈良時代に渤海の使いがやってきたとき、これは平安時代の史料に見られますが、大極殿、朝堂院で天皇の前に人々をずっと並ばせます。それは、位階の順番によって並ばせます。位階の順番によって衣服の色が違います。そうした中に、渤海の使節がやってきて何をするかというと、まず、日本の衣服をあげます。その儀式は摂津の国の海の上で行われました。渤海の使節は、船上でもらったその衣服を着て朝堂院に並んだ日本の役人たちの列の中に入ります。つまり、そこで渤海の使節は、渤海の国の衣服でなく日本の衣服を着て、しかも日本の序列の中に組み込まれることを潔しとする証なのです。日本に朝貢しに来たということはそういう意志表示なのです。そうした非常に記号論的な意味というか、衣服の意味、それから物々交換の意味が、明らかな形に示す、言葉は通じなくても態度で表す、行動様式で表すことに日本海沿岸の建物や神社が非常に大きな意味を持っていたのではないかと私は思っております。

## 付 録

### 史料 ①

一八〇六年十月七日

私とカルピンスキー海軍中尉は、我々は彼らを恐れてはおらず、彼らに危害を加える事もないということを納得させるために、銃を置いて、彼らのテントへ向かった。山から右の方に、サハリン人（彼らは自分のことをアイヌという）のテントが点在していた。島民は、我々を一番高いところに在った最大のテントに連れて行った。（中略）家長達に外套やビーズや鋏や綬や煙草などを贈った。それを貰った彼らは、我々を恐れなくなり、私を手漕ぎボートまで送りさえした。

十月八日

優しいアイヌ人は、我々を大人数で迎えに来てくれた。・・・私は旗を立てるよう命じ、軍艦旗と貿易旗を両方とも掲揚した。

・・・アイヌ人は我々を昨日と同じテントに連れて行った。村落の住民達と、新しい勲章所有者に、贈り物を贈った。ここで昼食をとっていたアイヌ人にロシア料理を食べさせた。家老は友好のシンボルとして、私に模様が彫られた箸を贈った。日本のコップなどのささやかな贈り物も贈りたがっていたが、私は受け取れなかった。用人に物々交換を行ってみるように命じたが、村落中には、ラッコの尻尾二つしかなかった。アイヌ人はラッコを与えた代わりに何も受け取れず、日本人が全部を持って帰ったと、身振り以示した。昼食を食べ終わってから、新しく出来た知り合いと一緒に、一番高い山に登った。場所をもっと良く観察するためでもあったし、アイヌ人が日本人の大きな村落を見せてくれるのではないかと期待していたからである。

・・・私は一人で川の向こう側にある彼らの村落に向かった。我々を恐れることはない、ロシア人は何にも悪いことはしないから、と、彼らに繰り返し云った。十人くらいは内気に正座し、残りの人たちはテントから秘かに覗いていた。私は彼らに煙草とリボンを与えて、

火の周りに彼らと一緒に座った。彼らは私の勇気に驚いた。

十月十二日

午後九時、私とコリュキン見習いが、海岸に向かった。カルピンスキー海軍中尉は、一人で一番偉い長老を捜し出し、物惜しみせぬ贈り物を手渡し、大砲を三回発射すると同時に、賞牌を長老の首に掛けた。すると彼が五十人、同郷人を呼び集め、驚くほど敏捷に・・・さらに、身分の高い島民二人にも、賞牌を授け、以前と同じ証書をあげた。その外に外套と様々なささやかな贈り物を贈った。

史料 ② 『日本書紀』卷第廿四皇極天皇元年九月癸丑朔乙卯《三》◆乙卯、天皇詔大臣曰、朕思欲起造大寺。宜発近江與越之丁。＜百濟大寺。＞

史料 ③ 『日本書紀』四皇極天皇元年九月癸酉《廿一》◆癸酉、越辺蝦夷、数千内附。

史料 ④ 『日本書紀』大化元年冬十二月乙未朔癸卯《九》◆癸卯、天皇遷都難波長柄豊碕。老人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難波、遷都之兆也。

史料 ⑤ 『日本書紀』大化元年十二月戊午《廿四》、越国言、海畔枯查、向東移去。沙上有跡。如耕田状。

史料 ⑥ 『日本書紀』大化二年是歳◆是歳、越国之鼠、昼夜相連、向東移去。

史料 ⑦ 『日本書紀』大化三年是歳 造淳足柵、置柵戸老人等、相謂之曰、数年鼠向東行、此造柵之兆乎。

史料 ⑧ 『日本書紀』大化四年是歳◆是歳、新羅遣使貢調。治磐舟柵、以備蝦夷。遂選越與信濃之民、始置柵戸。

史料 ⑨ 『日本書紀』白雉五年春正月戊申朔《一》◆戊申朔夜、鼠向倭都而遷。

史料 ⑩ 『日本書紀』白雉五年十二月壬寅朔己酉《八》◆己酉、葬于大坂磯長陵。是日、皇太子、奉皇祖母尊、遷居倭河辺行宮。老者語之曰、鼠向倭都、遷都之兆也。

史料 ⑪ 『日本書紀』卷第廿六齊明天皇四年夏四月◆夏四月、阿倍臣、<闕名。>率船師一百八十艘、伐蝦夷。齶田・淳代、二郡蝦夷、望怖乞降。於是、勒軍、陳船於齶田浦。齶田蝦夷恩荷、進而誓曰、不為官軍故持弓矢。但奴等、性食肉故持。若為官軍、以儲弓矢、齶田浦神知矣。將清白心、仕官朝矣。仍授恩荷、以小乙上、定淳代・津輕、二郡々領。遂於有間浜、召聚渡島蝦夷等、大饗而歸。

史料 ⑫ 『日本書紀』卷第廿六齊明天皇四年是歲◆是歲、越国守阿倍引田臣比羅夫、討肅慎、獻生羆二・羆皮七十枚。→『日本書紀』卷第廿六齊明天皇五年是歲。又高麗使人、持羆皮一枚、称其価曰、綿六十斤。市司咲而避去。高麗画師子麻呂、設同姓賓於私家日、借官羆皮七十枚、而為賓席。客等羞怪而退。

史料 ⑬ 『日本書紀』卷第廿六齊明天皇五年三月是月◆是月、遣阿倍臣、<闕名。>率船師一百八十艘、討蝦夷国。阿倍臣、簡集飽田・淳代、二郡蝦夷二百・一人、其虜卅一人、津輕郡蝦夷一百十二人、其虜四人、胆振・蝦夷廿人於一所、而大饗賜祿。<胆振・、此云伊浮梨娑陸。>即以船一隻、與五色綵帛、祭彼地神。至肉入籠。時、問菟蝦夷胆鹿島・菟穗名、二人進曰、以後方羊蹄、為政所焉。<肉入籠、此云之々梨姑。問菟、此云塗・宇。菟穗名、此云宇保那。後方羊蹄、此云斯梨蔽之。政所、蓋蝦夷郡乎。>随胆鹿島等語、遂置郡領而歸。授道奧與越国司位各二階、郡領與主政各一階。<或本云、阿倍引田臣比羅夫、與肅慎戰而歸。獻虜四十九人。>

史料 ⑭ 『日本書紀』卷第九神功皇后摂政四十六年春三月乙亥朔《一》◆乙亥朔、遣斯摩宿祢于卓淳国。<斯麻宿祢者、不知何姓人也。>於是、卓淳王末錦早岐、告斯摩宿祢曰、甲子年七月中、百濟人久・・弥州流・莫古三人、到於我土曰、百濟王、聞東方有日本貴

国、而遣臣等、令朝其貴国。故求道路、以至于斯土。若能教臣等、令通道路、則我王必深德君王。時謂久・等曰、本聞東有貴国。然未曾有通、不知其道。唯海遠浪嶮。則乘大船、僅可得通。若雖有路津、何以得達耶。於是、久・等曰、然即当今不得通也。不若、更還之備船舶、而後通矣。仍曰、若有貴国使人来、必宐告吾国。如此乃還。爰斯摩宿祢即以・人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百济国、慰劳其王。時百济肖古王、深之歡喜、而厚遇焉。仍以五色綵絹各一匹、及角弓箭、并鐵鋌四十枚、幣爾波移。便復開宝藏、以示諸珍異曰、吾国多有是珍宝。欲貢貴国、不知道路。有志無從。然猶今付使者、尋貢獻耳。於是、爾波移奉事而還、告志摩宿祢。便自卓淳還之也。

史料 ⑮ 『日本書紀』齐明天皇六年三月◆三月、遣阿倍臣、<闕名。>率船師二百艘、伐肅慎国。阿倍臣、以陸奥蝦夷、令乘己船、到大河側。於是、渡島蝦夷一千余、屯聚海畔、向河而營。々中二人、進而急叫曰、肅慎船師多来、将殺我等之故、願欲济河而仕官矣。阿倍臣遣船、喚至兩箇蝦夷、問賊隱所與其船数。兩箇蝦夷、便指隱所曰、船廿余艘。即遣使喚。而不肯来。阿倍臣、乃積綵帛・兵・鉄等於海畔、而令貪嗜。肅慎、乃陳船師、繫羽於木、举而為旗。齐棹近来、停於浅处。從一船裏、出二老翁、廻行、熟視所積綵帛等物。便換着单衫、各提布一端、乘船還去。俄而老翁更来、脱置換衫、并置提布、乘船而退。阿倍臣遣数船使喚。不肯来、復於弊賂弁島。食頃乞和。遂不肯聽。<弊賂弁、渡島之別也。>據己柵戰。于時、能登臣馬身龍、為敵被殺。猶戰未倦之間、賊破殺己妻子。

史料 ⑯

『晋書』列傳卷六十七

肅慎氏

肅慎氏 一名挹婁、在不咸山北、去夫餘可六十日行。夏則巢居、冬則穴處。父子世為君長。無文墨、・・無牛羊、多畜豬、食其肉、衣其皮、績毛以為布。有樹名雜常、若中國有聖帝代立、則其木生皮可衣。俗皆編髮、以布作襜、

徑尺餘、以蔽前後。將嫁娶、男以毛羽插女頭、女和則持歸、然後致禮娉之。周武王時、獻其楛矢、石罍。逮於周公輔成王、復遣使入賀。爾後千餘年、雖秦漢之盛、莫之致也。及文帝作相、魏景元末、來貢楛矢、石罍、弓甲、貂皮之屬。魏帝詔歸於相府、賜其王・雞、錦罽、綿帛。

#### 史料 ⑰

『懷橘談』下「続々群書類従」第九輯所収

国司帥中納言藤原家任が日記に云う。天仁三年七月四日、大木百支、海上より稻佐浦による。件の木、御示現有りて方尺寄り来たれり。所以何者因幡上宮御近辺長十五丈口一丈五尺の大木一本寄り来る。然に在地の人民疑いをなしながらこれを切りとらんとする所に大蛇件の木を纏侍る程に、人恐れて退ぬ。伐とらんとはかりし者は、皆病苦頻也。故に種々の祈祷をなす所に、御示現に云、出雲大社毎度御造立のとき、諸国の神明大行事となる。今度は我が大行事に相当、已に御材木採進せしめ畢。仍て件の木一本は我が得分也。急に此の木を以て我が社を造立すべしと示し給ふ。件の寄木正殿當作は、永久三年十月二十六日丁卯戌の時の遷宮也。是を寄木の造営と申す也。

#### 関連著書

「日本古代における民族と衣服」『日本の社会史』第八卷（岩波書店 1986.06）

「古代日本海の交通と衣服」『古代日本海域の謎Ⅱ ー海からみた衣と装いの文化ー』（新人物往来社 1989.11）

「環日本海 美の交流」『日本海学の世紀2』（角川書店 2002.03）

「古代環日本海交流と淳足柵」『律令制国家と古代社会』（塙書房 2005.05）